

## 《論文》

## 「源氏物語絵巻」を讀解する（2）—「関屋」—

田中幹子・西館加奈子

## 序

昨年に引き続き、日本最古の絵巻「源氏物語絵巻」が『源氏物語』をどのように絵画化したのかについて論じていく<sup>1</sup>。本研究は、札幌大学文化学部修士修了の西館加奈子氏『「源氏物語絵巻」について—「源氏物語絵巻」に込めた絵師の思いを探る—』を基に分析を深め、さらに後世の画帖や屏風と比較分析した共同研究である。

まず前稿「蓬生」巻の分析の際、紹介すべきだった稲本万里子氏の『「源氏物語絵巻」を読み解く—蓬生・関屋段をめぐる—』をとりあげる<sup>2</sup>。

## 「蓬生」絵巻の再分析

稲本氏が特に注目したのが詞書である。拙稿の「蓬生」では倉田実氏の「ほとんど忠実に再現している」という説を紹介した<sup>3</sup>。これに対し、稲本氏は詞書に注目し、物語本文にある外出の本来の目的であった花散里を連想させる風・かおり・橘という言葉や侍従など登場人物を整理し、惟光と老女房の間答、さらに末摘花の様子を削除して、末摘花に対する光源氏の想いだけに焦点を絞っていると分析された。稲本氏は、末摘花が唯一成長を感じられる場面を削除することで、詞書は末摘花にまったく焦点をあてていないと解釈されていた。

また稲本氏は、蓬生巻の絵は、「深い蓬を分け入って末摘花を訪ねる源氏の、その一瞬の情景を捉えた画面のように見えながら、実は物語のいくつか

の時間を複合し、ひとつの画面にまとめ上げたもの」と分析されている。

別時間に起きたことを一枚にまとめる手法は、「伴大納言絵巻」にもみられる。「蓬生」の場合も享受者が物語全体を知った上で楽しんでいると考えたと違和感はない。享受者は惟光が末摘花の安否を確かめてから光源氏を導くという手順を気にするよりは、待ち続けた末摘花が光源氏と感激の再会ができるという期待感を持って見守っているのではないだろうか。

さらに稲本氏は「蓬生」画を「この図様は絵巻が制作される以前に既に成立しており、この絵は先行図様の再活性化であったといえるだろう。」と先行図様の指摘をされていたが、稿者は現段階において「蓬生」画の先行図様はまだ確認できていない。

異なる場面を一つにまとめたという指摘や末摘花の心は省かれ、場面が光源氏側に集中しているという稲本氏の指摘は確かに首肯できる。しかしこの絵巻の享受者の心を想像してみると、光源氏側に立つと言うよりは末摘花の心境により添って絵巻を見ていたのではないだろうか。いつも待つ事を強いられる平安女性にとって末摘花の運命は他人事ではなかった。

享受者は絵巻を見る以前に『源氏物語』の内容を知っていると想像される。享受者はそれぞれの巻に思い入れがあり、最も享受者が欲する場面を絵画化していると考えるのが自然であろう。

柳町時敏氏は「詞書は感動的な再会の場にあっては「不都合な夾雑物」であり、男女ふたりの感動的な再会の場という世界を作り上げている」と指摘されている。光源氏にとって都合のよい物語として再構成されているとあえて解釈しなくても、享受者が最も望む場面を絵にしていると考えるのが適切ではないだろうか。

「蓬生」の巻の最高潮は、光源氏が末摘花を訪ねる場面である。髪を束ねた老女房は、荒れはてた邸とおなじく末摘花の落剥ぶりを示す象徴として描かれていると考えられる。絵巻の享受者は、待ち続けた末摘花の気持ちに感情移入して、再会の瞬間を待ち受けていたのではないだろうか。

稲本氏の分析は、「関屋」にもなされているので、本稿も稲本氏の論を踏まえて分析を進めたい。



### 「関屋」巻および空蟬の紹介

「関屋」は「蓬生」に続く巻である。この巻のヒロインは空蟬である。この巻で空蟬と光源氏が偶然再会する。光源氏が17歳の頃、雨夜の品定めで、中の品の女こそ手ごたえのある恋ができると教わり、その翌日、方違えで出逢ったのが空蟬である。空蟬は中納言兼衛門督の娘として生まれ育ち、宮仕えを予定していたが、父の死によって後ろ盾を失い、年の離れた伊予介の後妻として嫁ぐ。伊予介には空蟬と年の変わらない子どもがいた。夫が伊予に赴いている間に義理の息子紀伊守が光源氏を接待し、その夜、光源氏は強引に空蟬と契った。

空蟬は、光源氏に心の底では惹かれながらも、身分が釣り合わないと、その後はいくら光源氏に掻き口説かれても誇り高く拒み続けた。

光源氏は、彼女のつれないあしらいに却って思いが募り、空蟬の弟小君を手引きにし、再び紀伊守邸へ忍んで行く。そこで継娘と碁を打ち合う空蟬の姿を覗き見し、たしなみ深い空蟬に改めて心惹かれる。光源氏の夜這いを察した空蟬は、衣を残し逃げ去った。残された軒端萩と心ならずも契った光源氏は空蟬の薄衣を持ち帰った。光源氏は女の抜け殻のような衣にことよせて空蟬へ歌を送り、空蟬も光源氏の愛を受け入れられない己の境遇のつたなさ

を一人密かに嘆いた。

空蟬は光源氏へ心を残しながら夫と共に常陸国に下っていった。空蟬は光源氏が都を追われたことを風の便りで聞いてはいたが、一介の老受領の後妻にすぎない自分が手紙を出すわけにもいかず、日々を過ごしていた。

都に戻った光源氏は隆盛の日々を迎え、宿願成就の参詣に石山寺へ華やかな行列を仕立てて向かった。そこへ偶然にも常陸国から戻ってくる道中の空蟬と、逢坂の関で十二年ぶりにすれ違う。空蟬たちは車を木陰に寄せて光源氏の大行列をやり過ごそうとする。光源氏もまたありし日の空蟬の姿を思い返し、当時小君と呼ばれ今は成長した空蟬の弟右衛門佐を呼び出して言葉をかける。右衛門佐は、光源氏が不遇の折に光源氏側につかず、常陸へ下ってしまったことを悔やんでいた。右衛門佐からことのあらましを聞いた空蟬は、さまざまな思いに胸を痛めた。

光源氏が石山寺参詣から戻る日、都から右衛門佐が参上した。光源氏は右衛門佐に空蟬への手紙を託した。長年にわたり連絡もなく不通であったが、ずっと思っていたとの光源氏の言葉に、空蟬は今の立場や年齢を考え気後れするものの、やはり心動かされて返信する。

稲本氏は詞書に注目し、空蟬の身の上、京に上る常陸介一行の行列や、光源氏を通すために車から降り、控える様子を省略し、光源氏の帰京以降の物語として「関屋」巻の詞書を再構成し、光源氏と空蟬の邂逅そのものに焦点を絞っていると指摘される。

詞書

京にすみかへりたまふて、またのとしのあきぞ、ひたちはのほりける。せきいるひしも、このとのは、いしやまに御願はたしに、まうでたまひけり。九月のつごもりなれば、紅葉のいろくこきませ、しもがれのくき、むらくにをかしくみえわたるに、せきやより、さと、くづれいでたるくるま、たびすがたども、いろくのあをつきくしきぬひもの、く、りぞめのさま、さるかにをかしくみゆ。御くるまは、すだれうちおろしたまふて、かの、むかしのこぎみ、いまはゑものすけなるを、めしよせて、「けふのせきむかへは、えおもひすてたまはじ」など、のたまふ。御心のうち、いとあはれにおほしいづることゝもおほかれど、おほぞうにて、かひなし。をんなも、いにしへのこと人しれず、わすられねば、物あはれなり。

ゆくとくとせきとめがたきなみ  
だをやたえぬしみづと人  
はみるらん

## 新編日本古典文学全集（源氏物語2 p.359～）との本文比較

京に帰り住み（すみかへり）たまひ（ふ）て、またの年の秋ぞ常陸は上りける。

関入る日しも、この殿（は）に、石山に御願はたしに詣でたまひけり。（京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人々、この殿かく詣でたまふべしと告げければ、道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、ところせうゆるぎ来るに、日たけぬ。打出の浜来るほどに、「殿は粟田山越えたまひぬ」とて、御前の人々、道も避けあへず来こみぬれば、関山にみな下りゐて、ここかしこしたてまつる。車などかたへは後らかし、前に立てなどしたれど、なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、物の色あひなども漏り出でて見えたる、田舎びずよひありて、齋宮の御下り何ぞやうのをりの物見車思し出でらる。殿もかく世に栄え出でたまふめづらしさに、数もなき御前ども、みな目とどめたり。）

九月晦日なれば、紅葉のいろいろこきませ、霜枯れの草むらむ

ら（く）をかしう（く）見えわたるに、関屋よりさとはずれ出でたる（くるま）旅姿ども（の）、いろいろの襖（の）つきづきしき縫物、括り染のさまも（く）さる方にをかしう（く）見ゆ。御車は簾（うち）おろしたまひ（ふ）て、かの昔の小君、今は衛門佐なるを召し寄せて、「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」などのたまふ。御心の中いとあはれに思し出づること（ゝも）多かれど、おほぞうにてかひなし。女も、（人知れず）昔のこと（人しれず）忘（くら）れねば、（とり返して）ものあはれなり。

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらん

## 「関屋」巻の分析

「関屋」は現存する「源氏物語絵巻」で唯一の風景画である。9月末、光源氏は石山詣のために逢坂山を通った。緑青と群青を墨で縁取った山や松が描かれ、牛車が山道を縫うように進んでいる。左下に空蟬一行が描かれ、牛車から覗く衣装が空蟬を想像させる。対面している馬上の人は、光源氏の先触れである。中央部に岩山に光源氏が乗っていると見られる牛車の一部が見える。その奥に鳥居が見え、逢坂の関と考えられる。上部に琵琶湖の打出の浜が見える。

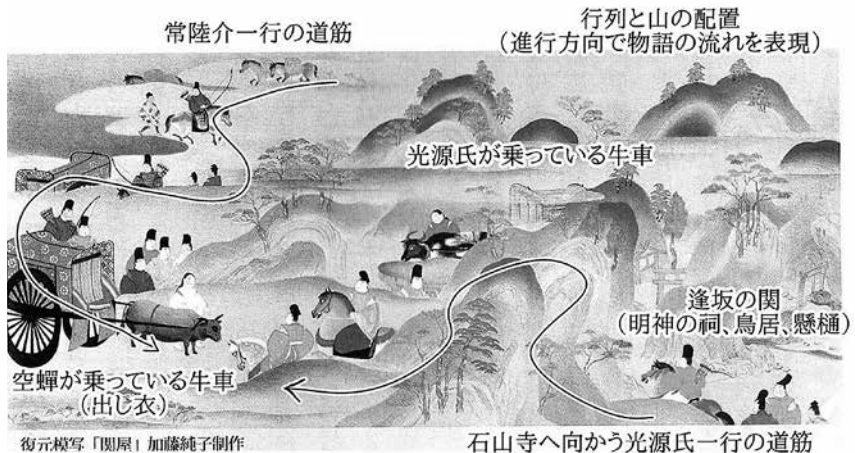
稲本氏は、「蓬生」と同様に「関屋」でも女性が排除されていると分析し、女性のいない空間に光源氏と常陸介という男性同士の連帯を描きたかったのではと考察する。しかし「源氏物語絵巻」の享受者は、光源氏と空蟬のすれ違いの運命に心寄せながら、その舞台である晩秋の「逢坂の関」の風情に浸っていたのではないだろうか。「源氏物語絵巻」の享受者はほとんど自由に外出できなかつた女君たちであると思われる。多くの享受者は美しい名所絵を堪能しながら、悲運の運命によって再会ができない空蟬の気持ち、それを思いやる光源氏の気持ちそれぞれに思いを寄せる。

逢坂の関は「逢坂」に「逢ふ」を重ね、男女の逢瀬を意味する歌が多く詠まれた。都から東国へ向かう際の人々の別れと出会いの場所である。この場面の背景には、蟬丸の「これやこのゆくも帰るも別れつつしるもしらぬもあふさかの関」の古歌が投影されている、という。「関屋」は、関所に置かれた建物を指す言葉だが、同時に「逢坂の関」を指す固有名詞としても使用された。

行列の描写が、詞書では省略され絵で表現している。「関屋」は山をめぐる空間を描くことに意味がある。光源氏が空蟬の一行と出会う場面を空から見ているような構図は、都からの距離、旅の行程を享受者に想像させる。

稲本氏は、詞書が古歌「これやこの」歌の影響下にあり、絵は、名所絵の応用であると指摘される。平安時代の屏風の確実な遺品は存在しないが、その屏風の風景を詠んだ所謂「屏風歌」は数多く残されている。

家永三郎氏は名所絵屏風の起源について、9世紀の仁明朝ごろから大嘗会に用いられ始めた倭絵屏風に由来するとされた。名所屏風絵の先行研究を紹介する。<sup>4</sup>



## 平安時代の名所絵

藤原一尊氏は10世紀後半になると名所絵屏風歌が数を増加させていることを指摘されている。<sup>5</sup>「関屋」は舞台が「逢坂の関」である。「逢坂の関」が詠まれた名所絵屏風歌の記録として残っている。延長二年(924)左大臣(藤原忠平)の北の方の四十賀の名所絵屏風を詠んだ「貫之集I」所載歌に近江の国の名所として「逢坂山」の例がある。さらに天禄四年(973)9月に行われた内裏名所絵屏風歌には近江の国の「逢坂の関」の歌が詠まれ、そこに「清原元輔Ⅲ」に収められている。

増田繁夫氏が平安時代の風景を描いた絵画には、屏風という型式以外のものにも、全国各地の有名な風景の描かれた名所絵とよぶべき、絵画としてより独立したものが行われていたと指摘されている。その例として『蜻蛉日記』

の作者の父藤原倫寧が天曆八年（954）陸奥守として赴任し、現地で陸奥の名所「ちかの浦」「躑躅の岡」などを描かせた絵を都に持ち帰って、作者に見せた折の歌を紹介する。<sup>6</sup>

「みちの国に、をかしかりける所々を絵にかきて、もてのぼりて見せ給ひければ

みちのくのちかの浦にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし」

増田氏は、地方に赴任した受領たちが、任国の名所を絵に描かせて持ち帰り、都の人々に見せることが行われていた例として「躬恒集」や「信明集」を紹介されている。

「おなじ年、伊勢の斎宮の御料に、国々の名ある所々をかかせ給へる御屏風の歌召しありしかば」（歌仙家集本躬恒集・260）、或るいは「村上の御時に、国々の名たかき所々を、御屏風の絵にかかせ給ひて」（歌仙家集信明集・3）<sup>7</sup>

このうち、「信明集」の例は村上帝が母后藤原穩子七十賀のために準備したものがもとになっている。穩子が亡くなり、改めて故母后の法会を飾るために、六曲一双二具の屏風に再構成されたものであり、二十四の画面に西は高砂・須磨から東は陸奥の浮島・出羽の八十島までおよぶ名所が描かれていたと考えられる。

また、10世紀後半、大納言藤原為光が伊尹の次女と結婚し、一条殿寝殿に住んだ際、名所絵障子が描かれた記録がある。為光没後は、その寝殿は詮子がわが子一条天皇の里内裏とした。この障子絵和歌は、清原元輔・大中臣能宣・源順・源兼澄の4人によって詠まれた。

さらに近藤みゆき氏が「一条朝期名所絵屏風の一様相—源道濟集所載「寛弘五年七月或所屏風」と藤原道兼の粟田山莊障子絵詩歌について—」<sup>8</sup>において「妹背山」「布引滝」など多くの歌枕が名所絵として詠まれていることを紹介されている。おそらく「逢坂の関」も多くの名所絵に描かれたと思われる。

この他、『源氏物語』『関屋』と類似性を感じさせる絵が『平家納経』に見える。『平家納経』は、平家一門が繁栄を願って巖島神社に奉納した装飾経



## 寿量品 第十六（平家納経）



## 観音品 第二十五（平家納経）



## 陀羅尼品 第二十六（平家納経）



である。『法華経』30巻、『阿弥陀経』1巻、『般若心経』1巻、平清盛自筆の願文1巻と、経箱・唐櫃からなる。清盛の願文に「善を尽くし、美を尽くし」とある。芸術性の高い御経である。平清盛・重盛・頼盛・教盛などが、それぞれが一巻を筆写した。長寛二年（1164）、厳島神社に一部が奉納され、仁安二年（1167）までかかった。そこに描かれた緑色で厚くぼってりと山を遠方に描く図柄は、「関屋」の絵に通じる印象をもたらす。『平家納経』や名所絵によって「源氏物語絵巻」モデルとなった「逢坂の関」絵があったと考えられる。

以下、「源氏物語絵巻」以降の後世に描かれた関屋の場面を比較していく。

## 後世の『源氏物語』「関屋」の描かれ方

次に「源氏物語絵巻」以降に描かれた「関屋」絵を紹介する。なお、これらは朝日新聞出版『絵巻で楽しむ源氏物語』（十六帖関屋）によって紹介されたものである。（説明文の後に該当絵図を掲載する）

### （1）国宝「源氏物語関屋濡標図屏風」俵屋宗達 静嘉堂文庫美術館

江戸時代前期とされるものである。この屏風は「濡標」と対になるものとされる。この場面は「源氏物語絵巻」「関屋」で描いた場面より時系列としては、後の場面である。右衛門佐を介しての光源氏の伝言に対して空蝉が独詠した場面とされる。光源氏の牛車が右から左へ進もうとしている。前に立っているのが右衛門佐、中央に関所、左の番小屋が関屋と見なされる。左の上には轆を下ろした車の一部が見られ、ここに空蝉が乗っていると思われる。山々は、上部に半円形に連なる。非常に洗練された印象を与える。

「源氏物語絵巻」の俯瞰的な視点で描かれていたものとは対照的に二人の偶然の再会部分に焦点が置かれている。

（1）



### （2）「源氏物語図屏風」「右隻関屋」狩野派 江戸時代中期 出光美術館

江戸中期とされる絵である。「源氏物語絵巻」と同じ「逢坂の関」での出

会を描く。左手の土手から右の関所に向かっているのが光源氏の牛車である。関所にいるのが、武士であることが時代性を感じさせる。畏まって控えているのが空蟬の一行である。二人の圧倒的な身分差を感じさせ、二人に交流があるように思えない。

(2)



(3) 「源氏物語図屏風」 土佐光吉 桃山時代 メトロポリタン美術館

「源氏物語絵巻」と同場面が描かれている。画面右から従者達とともに進むのが光源氏とされる。関所らしい柵が中央霞のすき間から見える。左手、牛車の轆を下ろしているのが空蟬の一行である。山のふもとにも人々が控えている。他の絵に比べ、空蟬側に女性の姿が多いことが特徴である。女性達の姿は、桃山時代の風俗を反映し、着物の細かい文様、左右で違う色使いや、ゆったりとした着こなしなどきらびやかである。人物の顔も目元や髭、髪など極めて繊細な線で描かれている。光源氏や空蟬の心よりも、華やかな平安絵巻を描く装飾品という観点で描いている印象である。



(4) 「源氏物語絵巻」住吉具慶 江戸時代前期 MIHO MUSEUM 蔵

「源氏物語絵巻」と同場面である。紙面右下の幅三分二以上を使って右から左に進む光源氏一行の大行列が描かれている。関を挟んだすぐ向こうに空蟬一行が控えている。中央に岩山の一部が描かれている。省略された自然描写にも空間の広がりを感じさせる。ゆうゆうと進む光源氏の堂々とした様子と身をかがめる空蟬一行が対照的である。二人の圧倒的な身分差を感じさせる。



## (5) 「屏風貼付源氏物語図色紙」 伝土佐光則 江戸時代前期 個人蔵

「源氏物語絵巻」と同場面である。画面下半分を用い、光源氏一行が左から右へと進んでいる。人物が大きく描かれており、従者の着物の文様、表情、牛の飾り紐の文様までが細かく描かれている。空蟬一行は、画面上半分右上に大きく描かれている。艶やかな衣装やゆったりとした桃山風の着こなし、楽しんでいるような佇まいが、物見遊山をしているように見える。光源氏と空蟬二人の心の様子はまったく想像できない。色紙の狭い空間に光源氏と空蟬が対角線に配置され、道のりの連なりや色づいた木々がつめこまれている。絵師は土佐光則と伝えられる。

(5)



## (6) 「源氏物語画帖」土佐光信 室町時代後期 ハーバード大学美術館

牛車から覗く光源氏が描かれている珍しい構図である。光源氏が空蟬との偶然の再会に驚きながらも、空蟬の弟、右衛門佐に手紙を渡している姿が描かれている。画面上部に空蟬の牛車を描き、右側に関所が描かれている。「週刊朝日百科」の解説に空蟬の従者達の着物は右と左の身ごろの異なる色や模様を合わせる「片身替わり」となっている。桃山時代に流行するスタイルを先取りしている例と説明されている。ゆったりとした着こなしが時代を反映している。

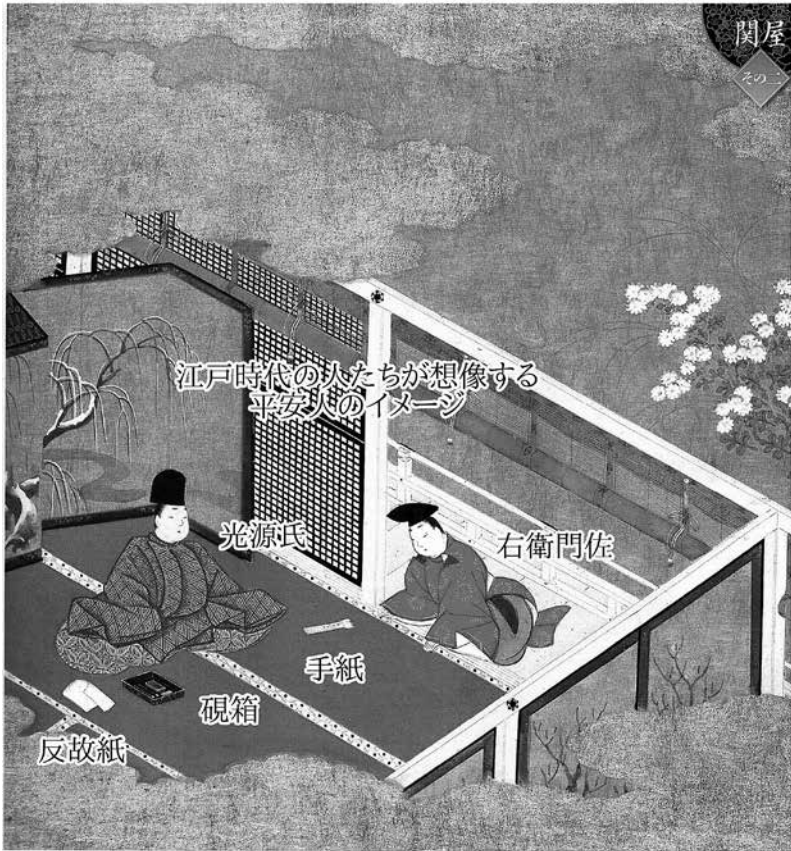
(6)



## (7) 「源氏物語画帖」伝土佐光則 江戸時代前期 根津美術館

異例の場面が描かれている。珍しい例である。都に戻った光源氏が改めて右衛門佐を呼び、手紙を託す場面である。硯箱と反故紙、渡した手紙に目が行く。光源氏も右衛門佐も顔立ちが白塗りでふっくらとして、口元が朱に塗られている。江戸時代の人々が想像する平安人が描かれている。

(7)



## (8) 「源氏物語画帖」 作者不明 江戸時代中期 石山寺蔵

前掲と同じく光源氏が右衛門佐を呼んで空蝉への手紙を託している場面の白描画。光源氏は結び文を持ち、右衛門佐が手を差し出す瞬間を絵画化している。光源氏の口元に朱が引かれる。

(8)





## まとめ

「源氏物語絵巻」の「関屋」の風景画は、名所絵を基に描かれたとされてきた。山々をうねうねとめぐる光源氏と空蟬の歩みは、12年間交わることなく生きてきた二人の人生を表しているかのようである。後世の「関屋」が光源氏と空蟬の身分差や、行列の華やかさ、あるいは「関所」に焦点が当たっているのに対し、「源氏物語絵巻」では俯瞰的視点から最も広い空間を描いている。「源氏物語絵巻」の「関屋」を絵画化する際、絵師たちは古くから歌に詠まれてきた「逢坂の関」を映像として見てみたいという享受者の希望を叶える点に重点を置いたと思われる。同時に、物語世界としては、光源氏と空蟬のそれまでのまったく違う人生の道をふりかえらせるような構図になっていると言えるのではないだろうか。光源氏にはこれからさらにかげあがる勝者の道。空蟬は、ひと時だけの甘く苦い過去を抱えていく道。「源氏物語絵巻」の「関屋」はうねうねとした人生の道のりを歩んできた二人が、結局男女としては交わることのない生涯であることが絵画化されていると見ることができる。

追記：本稿は2021年度札幌大学個人研究助成の成果である。

## 資料一覧

[参考文献など]

- 武者小路穂『岩波講座 日本文学史 第四巻 中世 絵巻物と文学』岩波書店 1958年  
 秋山光和『日本繪巻物全集 源氏物語繪巻』角川書店 1975年  
 小松茂美『日本名跡叢刊 第四六回配本 平安 源氏物語繪巻』二玄社 1980年  
 阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集 源氏物語』小学館 1996年  
 佐野みどり『じっくり見たい「源氏物語絵巻」』小学館 2000年  
 NHK 名古屋取材班『よみがえる源氏物語絵巻 全巻復元に挑む』日本放送出版  
 2006年

- 朝日新聞出版『絵巻で楽しむ 源氏物語 五十四帖』2012年4月1日号（十六帖関屋）
- 稲本万里子『源氏絵の系譜 平安時代まで』森話社 2018年
- 倉田実氏 web 連載「絵巻で見る 平安時代の暮らし」 <https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/emakil>（2020年1月8日閲覧）
- 東京藝術大学日本画 国宝「源氏物語絵巻」現状模写事業 <https://nihonga.geidai.ac.jp/page-934/>（2020年1月8日閲覧）
- 藤田 一尊「平安朝屏風歌の史的考察 --10世紀における名所絵屏風の展開」に『日本文学研究』日本文学研究 (36), 93-102, 1997-02. 大東文化大学日文学会
- 増田繁夫「平安朝の名所絵屏風と屏風歌 -- 白沙青松の風景」武庫川国文 (65), 13-24, 2005-03、武庫川女子大学国文学会)
- 近藤みゆき「一条朝期名所絵屏風の一様相—源道済集所載「寛弘五年七月或所屏風」と藤原道兼の粟田山莊障子絵詩歌について—」千葉大学教養部千葉大学教養部研究報告 A・千葉大学教養部研究報告 A (24), p29-56, 1991)
- 秋山光和『平安時代世俗画の研究』吉川弘文館 2002年
- フェリス女学院大学編『源氏物語の魅力を探る（横浜社会人大学講座 フェリス・カルチャーシリーズ）』翰林書房 2002年
- 辻惟雄監修『増補新装 カラー版 日本美術史』美術出版社 2003年
- 小松茂美『図説 平家納経』戎光祥出版 2005年

## 注

- 1 田中幹子・西館加奈子『『源氏物語絵巻』を読解する（1）—「蓬生」—』札幌大学総合論叢第51号, p45-60, 2021
- 2 フェリス女学院大学編『源氏物語の魅力を探る（横浜社会人大学講座 フェリス・カルチャーシリーズ）』翰林書房 2002年
- 3 倉田実氏 web 連載「絵巻で見る 平安時代の暮らし」 <https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/emakil>（2020年1月8日閲覧）
- 4 家永三郎『上代倭絵全史』高桐書院 1946年
- 5 藤田 一尊「平安朝屏風歌の史的考察 --10世紀における名所絵屏風の展開」に『日本文学研究』日本文学研究 (36), 93-102, 1997-02. 大東文化大学日文学会
- 6 増田繁夫「平安朝の名所絵屏風と屏風歌——白沙青松の風景」武庫川国文 (65), 13-24, 2005-03、武庫川女子大学国文学会)
- 7 同上
- 8 近藤みゆき「一条朝期名所絵屏風の一様相——源道済集所載「寛弘五年七月或所屏風」と藤原道兼の粟田山莊障子絵詩歌について」千葉大学教養部千葉大学教養部研究報告 A・千葉大学教養部研究報告 A (24), p29-56, 1991)